

覚え込む苦痛と忘れ去る苦痛の 悲喜こもごも

ロディアのメモパッドさえあれば……

覚えている限り、小学校低学年にまで遡っても確かにやっていたのがメモを取ることであり、それは今に到るまで続いている。片っ端から忘れてしまうので、物心がついたときには拙い文字や意味不明の絵をチラシの裏に書き留めていた。私には、どうやら記憶する力がないらしいのだ。

「記憶は、若い娘のように、気まぐれなお天気屋である。いままで100回も与えてくれたものをまったく不意に拒んだりするかと思えば、思いがけないときに、まったくひとりで持ち出してきてくれたりする」

と『知性について』でショーペンハウエルが書いているのを見つけたときには、その通りだ!と叫んで、事もあろうにさっそくメモしたくらいである。同じことをもっと短く表現しているのは『エッセー』を著したモンテニユだろう。

「記憶はわれわれの選ぶものを見せてくれない、自分の好きなものを見せてくれる」

もう、ただただ平伏するしかない。あなただって同じようなものだろうと信じたいけれど、どっこい問屋はそう簡単には卸してくれないようで、何を聞いてもスラスラと答えてくれる人がこの世には確かに存在する。実際に、精神衛生にはよろしくない。40年近い間に取ったメモの山を順に綴じていけば、みっともない人間の精神史ができてと思うけれど、そのメモさえどこかに捨ててしまうから、ほとんど何の役にも立っていないのに、今もせっせと取り続けている。

ときたま、どうしても必要な記憶を求めてメモの頁を繰っていると、忘れていた別のことを思わず発見してそちらに気を取られてしまい、あれこれと考えるうちに、はて何を探していたのかといつの間にか最初の

探し物が思い出せないということになったりもする。モンテニユの言葉がガンガンと鳴り響くのは、そういうときだ。

そんなこんなだから、メモ帳とかメモパッドの類いはありとあらゆるモノを試してきた。付き合いがもっとも長いのは、メモ界の巨匠であるRhodia(ロージャと発音する人が多いが、正確にはロディアだ)。A7からA3までの規格準拠品の他にもさまざまなサイズがあって、はまっていたときには8番から38番までの9種類全部を使っていた。この製品を礼賛する文章は数多いが、どれもの外れのような気がする。使い込んだ人間ならぜったいに書かすにはいられない点に触れていない。

曰く、表紙のオレンジ色は混沌の机上にありがちな紛失の危険を回避する注意色であるとか、耐水性の表紙がシャツの胸ポケットに入れていても汗で貼り付かないとか、考え抜かれた紙質なので筆記具を選ばずにスラスラと書けるとか、綴じシロのすぐ下にマイクロシン目が入っているので任意の頁を自由に切り取れるとか、段ボールの台紙がどんな状況でも書き込める強度を保証しているとか、どのサイズを選んでも80枚を綴じており厚みがぴったり80ミリに統一されているとか、5×5ミリの方眼が紙の全面に印刷されているので定規の役目を果たしつつ正確な図形も描けるとか、このままどんどん書き続けて2ページを終えることができるほど枚挙に暇がない。

デザイナーのポール・スミスは、10日に1冊のペースでブロックメモと呼ばれるこのメモパッドを今も消費していると聞かすが、なるほどRhodiaに悪戯書きをしているときに限っていいアイデアが浮かぶのは不思議である。方眼の規則性が、ある種の啓示をも

たらずに違いないという文章を書いた米国の作家を知っているが、それをメモしたRhodiaがどこかへ行ってしまって検索ができないようでは、メモとはいったい何なのかと嘆かすにはいられない。

クオパディスは愛好家の巣窟

私が最終的に常用したのは2種類だった。1つは最小のA7サイズで、これはモンブランやダニエル・クレミュの革カバーに入れて使うと失神しそうなくらいに塩梅がいい。パンツの尻ポケットやシャツの胸ポケットとベストマッチである。もう1つはA5サイズで、こちらはスケッチや悪戯書きを含めて絵を描くには最適な大きさであり、加えてチラシやチケットなどを糊付けしていくとちょっとしたデータベースとしても使える。

100冊近く使ったある日、ズラリと並んだRhodiaの景色を眺めていると曰く言い難い幸福感に包まれたりする。どれでもいいから1冊を抜き取って頁を繰っていると、次から次へと再発見があるので時間がいくらあっても足りなくなる。そんな時にフツと気づくのは、何も書かれていない裏頁の空白なのだ。使ってみればわかることだが、Rhodiaはめくって現れた頁に書き込むばかりで、その裏頁に書き込むことを想定して作られてはいないのである。いったん裏頁の空白に気づくと、何やらもったいない気分になってくる。

礼賛の文章がどれもの外れだと先に書いたのは、この点なのだ。裏頁を使おうと思えば使えなくもないが、そうすると何と何の間の抜けた感じになるから不思議だ。ペラペラと繰りつつサクサクと書き込むからRhodiaはいいのであって、見開きが上下の

ノートはそういう宿命を担っている。筆記のスピードを大切にしている証拠でもあるし、デスクトップ以外で書き込むことを想定しているからでもある。これが左右の見開きノートだと、ちゃんと線った端から書き込むことになるので裏頁が空白になることはないのだ。というわけで、上下の見開きははっきりと欠点であるのだが、逆に大きな美点と言うか、もっともRhodiaらしいところだとも言える。A5サイズの定価は1冊450円だが、片頁しか使わないので900円という計算もできる。安いようで意外に高いノートパッドではある。

ちなみに、Rhodiaを作っているのはフランスのQuoVadis(クオバディス)という会社だ。ベルトラミ医師が1952年に世界で初めて開発した見開き1週間のデザインによるスケジューラーは同社の製品である。わけても代表的なアジェンダ・プランニング・ダイアリーは日本でも根強いファンを持ち、国産スケジューラーに与えた影響は計り知れない。また、紙好きには有名すぎるブランドであるClairefontaine(クレールフォンテーヌ)やG.Lalox(ジョルジュ・ラロ)なども同社のブランドであるから、知らず知らずに愛用している人が多いのではないかと思う。

奥が深い正方形のメモ紙が

Rhodiaと同じくらい愛用しているエルメスのメモパッドは、8.9×8.9センチの正方形のメモ紙を革製パッドに載せて、その四隅をパッドに挟み込んで固定している。昔懐かしい写真アルバムの収納方式に近い。書いては1枚ごとに抜き取り、裏を返して挟み込んでまた書き込む。紙はエンボス加工されたエルメスのマークが下端に浮き出た上質なもので、やはり筆記具を選ばない。正方形なので、アイデアを殴り書きしておいて3×3の方眼に並べるだけで川喜多次郎のKJ法ができてしまうあたりが使い

方の発展形としてはおもしろい。

1日のメモは10枚くらいを重ねて挟んでおけば足りるようで、パンツの後ポケットならジーンズでもスーツでもチノパンでも入らないポケットはないので、起きてから寝るまで持ち歩ける。革製のパッドには8.75センチの小さな銀製ボールペンを付けられるので、これだけですべての用件を足そうと思えばできるわけだ。あなたに秘書がいれば、表に午前、裏に午後のスケジュー



photo : Hiroji Kazuo

フランスのQuoVadis(クオバディス)社によってつくられた、メモパッドRhodia。A7からA3の規格サイズはもちろん、さまざまな大きさがある。どんな状況でも書き込める強度、どのサイズも厚みがびったり80ミリに統一されている。5×5ミリの方眼が紙の全面に印刷されているので正確な図形も描けるといった利点があるが、最大の利点(美点)は紙の裏にはメモがとれないこと。

ールを書き込んだ1枚を出社のときに渡してもらえばダイアリーとしても使えるという寸法だ。

紙をストックしておく箱は600枚を重ねた立方体で、紙製と木製がある。箱から10枚ほどを抜き取ってパッドに挟み込むのは儀式めいていて楽しいが、書き込んだ紙をうまく保存できて、その上に閲覧に供せるホルダーがなかなか見つからないのは玉に瑕だ。さっさと忘れるのがよろしいというメモの極意を体現しているようで、これはこれで見切りがいいのかも知れない。私は週末にまとめて整理して、大きな手帳にポイントを書き写したりしている。ご苦労

なことだが、その一ときが次週を俯瞰するのにちょうどよかつたりする。

書き写す方の手帳は、19.5×14センチの革製カバナーにスケジューラーとノートを連装できるエルメスが持ち歩くにはちょうどいい。

.Macの100メガバイトも不安……

両方のメモパッドともフランス製であるのは、きっと彼の国がモンテーニュの故郷であるからだろう。覚え込む苦痛よりも忘れ去る苦痛に怯えるのがフランス人だという。そんな解悟がメモに結実しているとしたら、まったく形状の異なるRhodiaとエルメスが煩惱と真っ向から対決しているようで何やら微笑ましく思える。登るルートは違いこそすれ、というやつだ。

Macにもメモパッドという小さくても優秀なソフトがシステムに寄り添っていたが、最新のOSではスティッキーズという付箋ソフトに様変わりしている。これはこれで使い始めると止められなくなる。何くれとなく書き込んでいくと、付箋の数がどんどん増えて整理できなくなる。そこで、100メガバイトのオンラインストレージ・サービスであるMacにバックアップして貯め込むことになる。今度こそは四散することは

ないだろうという安心感が手伝って、デスクワーク中はスティッキーズが大活躍ということになる。メーカーとどっこの重要ソフトである。

そんなある日、アップルのサーバーがダウンしたというニュースが流れてきて、心臓が止まりそうになったりする。幸いというか当たり前というか、記憶しておいたデータに損失はないという。しかし、一抹の不安は消えない。さて、もっと使いやすいノートパッドはないものかと、何事もすぐに忘れてしまう私は今日も書き留めることに四苦八苦し、思い出すことに七転八倒している。





[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp